

連載 私の町はどんな町⑤

桶川市・北本市

上尾宿と桶川宿との中間に三〇米位の黒塀で囲まれた須田家があります。この須田家は武州紅花の仲買問屋です。

江戸時代は出羽の国(山形県)の特産品で、布や紙の染料、食品着色料、口紅の原料に用いられ、一八〇〇年頃江戸の商人が出羽地方まで買い付けに行く長旅を嫌い、桶川宿の農民に種子を分与して栽培させたところ、金のなる花として競って紅花耕作に専念したとのことです。

これを『桶川臙脂』と称し出羽紅花より一か月も出荷が早かったので、上方では出羽産より高値で取り引きされたとのことです。

宿内には今も紅花の仲買人商家の名残りの大きな瓦屋根蔵造りの広い間口の家が点在しています。

宿の中央部に府川家の「桶川宿本陣跡」があります。総建坪二〇七坪の宏大な建築で中山道でも屈指の本陣です。

今シリーズは皆さんの住む町の歴史を取り上げる新シリーズです。中山道を北へたどりませう。

一八六一年、皇女和宮が徳川家に嫁ぐため江戸入りする最後の夜をここで過ごし、落ちていく身を知りながらもみじ葉の人なつかしくこがれこそすれ、という詩は、この宿で詠んだといわれています。

次の鴻巣宿との間に北本市があり、中山道開創時には宿場があり今も北本宿という町名が残っています。後に鴻巣宿が出来るまで鎌倉街道との分岐点として栄えていました。

北本市石戸の「東光寺」に頼朝の弟、蒲冠者源範頼ゆかりの「石戸蒲桜」があります。この蒲桜は関東地方でも古い桜で「日本五大桜」の一つに数えられています。根元に古びた五輪の石塔があり、範頼の死後、妻の亀御前によって建てられたとのこと。

頼朝が伊豆に流された時、

幼少の弟範頼は平家の追討を逃れ母と共にこの地にたどりつき、地元の武将「安達藤九郎盛長」により堀の内の館で盛長の娘亀御前を妻に迎え、頼朝の拳兵に駆けつけるまでの二十年間、ここで平和な日々を過ごしていました。

この安達盛長という人物は頼朝の忠実な武将で、頼朝拳兵後石橋山の合戦で破れて房総に逃亡した時に頼朝と共に生き残った七人の部下の一人で、その後義経と共に一ノ谷合戦等で活躍し、生涯を源氏の天下取りに貢献しました。

頼朝と盛長の関係で面白いエピソードを紹介します。

頼朝が伊豆に流された時の乳母「比企禪尼」の娘「丹後局」が頼朝の初恋の人で、女性遍歴が多かった頼朝が最初に手をつけた女性です。

嫉妬に燃えた北条政子に殺害されそうになった丹後は、畠山重忠の計らいで泉州住吉に逃れ男の子を出産しました。本来なら頼朝の嫡子ですが政子の目を眩ますため、その子に最も遠い九州の薩摩に領地を与え領主としました。

後の「島津忠久」で、国内最強の薩摩藩の祖となりました。

頼朝は初恋の丹後局が忘れられず、丹後を頼朝に忠実な安達盛長の妻にして鎌倉に住ませ、夜な夜な安達屋敷に通い続け、逢う瀬を楽しんでいたとのこと、ここまでくると盛長の忠実さも度を越しているのではないのでしょうか。

脱線ついでもう一つ。丹後局の妹は川越庄の「河越太郎重頼」の妻です。頼朝は義経の行動に疑心し、彼の動向を監視させる目的で、嫌がる河越重頼の十五才の娘を無理やりに義経に嫁がせます。その娘は義経と共に安宅の関を

通り奥州平泉への逃避行に同行し、一一八九年猛火に包まれた平泉の持仏堂で義経と共に自害し、短い生涯を終えています。しかし悲劇はここからです。頼朝は極度の猜疑心から義経憎しが昂じて、義経の妻の父であるとの理由で河越の所領を没収し、重頼をその子重房と共に誅殺してしまっています。重頼にとってこんな理に合わないことはないでしょう。

中山道の北本駅を過ぎた処に日本橋から十一番目の「原馬室一里塚」の左側の部分が当時の原形を留めています。

(小島 次郎)



源範頼ゆかりの「石戸蒲桜」(北本市 東光寺境内)